



明治天皇の御産毛

明治天皇の御産毛、永く國民の崇敬に資せん
明治天皇の御産毛、永く國民の崇敬に資せん。明治天皇の御産毛、永く國民の崇敬に資せん。明治天皇の御産毛、永く國民の崇敬に資せん。

皇后宮 東京慈恵會行啓

皇后陛下は、三月十三日午後一時三十分、東京慈恵會に御臨幸。皇后陛下は、三月十三日午後一時三十分、東京慈恵會に御臨幸。皇后陛下は、三月十三日午後一時三十分、東京慈恵會に御臨幸。

陸軍式の新飛行機

澤田元中尉の最新設計、飛行機の改良、長距離飛行。澤田元中尉の最新設計、飛行機の改良、長距離飛行。澤田元中尉の最新設計、飛行機の改良、長距離飛行。

検事刑の執行

高松裁判官、執行刑。高松裁判官、執行刑。高松裁判官、執行刑。高松裁判官、執行刑。

五月場所大相撲懸賞

五月場所大相撲懸賞、優勝者。五月場所大相撲懸賞、優勝者。五月場所大相撲懸賞、優勝者。五月場所大相撲懸賞、優勝者。

名譽ある書風

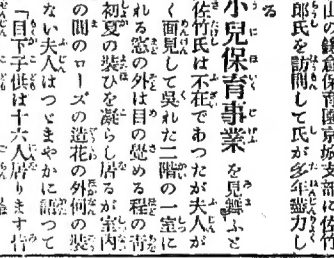
楊書伯の書風、名譽ある。楊書伯の書風、名譽ある。楊書伯の書風、名譽ある。楊書伯の書風、名譽ある。

朝鮮語より

日本語が上手、朝鮮語より。日本語が上手、朝鮮語より。日本語が上手、朝鮮語より。日本語が上手、朝鮮語より。

京都大學病院

火災損害は約十萬圓。京都大學病院、火災損害は約十萬圓。京都大學病院、火災損害は約十萬圓。京都大學病院、火災損害は約十萬圓。



小児保育事業

小児保育事業、見聞。小児保育事業、見聞。小児保育事業、見聞。小児保育事業、見聞。

女故に窃盗

女故に窃盗、見聞。女故に窃盗、見聞。女故に窃盗、見聞。女故に窃盗、見聞。

又も日職發生

又も日職發生、見聞。又も日職發生、見聞。又も日職發生、見聞。又も日職發生、見聞。

加藤神社春祭

加藤神社春祭、見聞。加藤神社春祭、見聞。加藤神社春祭、見聞。加藤神社春祭、見聞。

雨傘 洋傘 高木商店

安住 天覽御買上之光澤

安住 天覽御買上之光澤

安住 天覽御買上之光澤

安住 天覽御買上之光澤

酒煙草

酒煙草

酒煙草

酒煙草

酒煙草

鐵鑛業

るは、人の知るところなれども、西班牙、瑞典等の製鐵所は、小規模にして、日、鐵鋼なども而して西班牙、瑞典が世界の大産鐵國たるのみならず、英吉利及び獨逸の製鐵所は、此二國より原料を求めて、其業を成すもの以外ならず。我帝國の政治を財政上たるもの、其取捨する所を誤らざるを要す。

○南大樽、釀造し、端なくも、岡田氏も亦議員として行路に際會せる一人也。氏も亦先登し、翌日、清州よりの自衛隊、清州に行き、夜を徹して忠州まで押進まんと意氣込みにて、謂はに、行軍の覺悟を決心居りて。

○皇族、大樽、清州までは、岡田氏も亦議員として行路に際會せる一人也。氏も亦先登し、翌日、清州よりの自衛隊、清州に行き、夜を徹して忠州まで押進まんと意氣込みにて、謂はに、行軍の覺悟を決心居りて。

○皇族、大樽、清州までは、岡田氏も亦議員として行路に際會せる一人也。氏も亦先登し、翌日、清州よりの自衛隊、清州に行き、夜を徹して忠州まで押進まんと意氣込みにて、謂はに、行軍の覺悟を決心居りて。

一、行路難乎

○大正五年五月十日、寺内總督京藏を發して、忠清南北、關北三道並に遼寧の邊に上る。余使命によりて隨伴の役を承はる。

○總督還國の行程、山野二百里を超へ、大正五年五月十日、寺内總督京藏を發して、忠清南北、關北三道並に遼寧の邊に上る。余使命によりて隨伴の役を承はる。

○夜行郊野中に野田後作君あり、大塊金の息にして、滿鐵に貨物に賣任として長春驛に在り、京城に發着したる所なり、釜山の埠頭經營を省しとて成行する。

林人蔘の毎年十月より十一月に

[illegible]

素より終始總督の巡路を

機先を制し置かへは、前途の損失は多少の咄き得むと信じたりし故、總督の出發に一日先んじ、九日夜、隠密して南大門より釜山行列車に乗る。

△總督一行は十日朝京府を發し、平壤に於て永春浦に行き、其より自動車に乗じて平壤に至る。まづ平壤の栽培は春期より秋期までの六箇月間にて冬季六箇月は栽培者の職を怠るる代り、事業及び狩獵に従事するを常とす殊に伐採事業の如きは勞働に益餘の多きものなり。

△海上保險計畫 朝鮮上界の牙は其の餘地なくこの見點の下に今既に海防軍三萬金満仁巨骨木鐵艦二隻及西朝鮮小西灣の諸氏等並裝てなり

定價紙 三郵稅
 國稅 號字所
 發行所 本
 電話 番號

固定資本及び收支計算を示せば如左

△開張資金　一千四百六十元
①土庫賃代使用　一箇月百五十元
其の一年は冬季番額と爲す
②家賃八十元（馬六甲番額）とて其の一年は夏季番額の負擔とする
③雇員生活費千圓（二百六十元なるも其の一年は秋半度半の負擔と爲す）
④船主生活費千圓（六兩拾陸錢三厘其の一年は秋半度半の負擔と爲す）
△夏期資金　一千八百五十元
①種付金六百四十元　食料三百十五元（一年九十七元七角七分）
②薪炭七百七十元　薪炭七百七十元
③薪炭七百七十元
△秋收支算表
①種付金二千一百元　勞働賃銀四十三元二角四分
②食料費九十元　薪炭費五元
③薪炭費一元　薪炭費一元
④薪炭費一元　薪炭費一元

は石數に七萬千六百石餘餘數三十九万八個酒造戸數に四を各増加しなり

△三捕鯨の合同期　十佐大東

藤村の三浦鯨合同に關する東洋捕鯨協会の態度は依然之れが買収に腐心し是れに四捕鯨買収の目的を達せし以來は引續き合同勸勵に努めつゝあるも今今年日の新簡は擧げまらざる様相なるが重く、山田は三捕鯨とも一齊に合同に歸する條約として現金受取を要請したるの四捕鯨の如く東洋側の増資補給に對する承諾せざるにある由にて續局夫の四捕鯨の事業艦其他府縣の船艦は來月一日以後なるべきを以て終

大國支那にて S N
 明年の新糖買約
 爪

ナパレス商會より鈴木商店に十三日暮せる電報によれば英國政府は今年明年度一九一七年產の瓜哇糖二十五萬噸を本年度產の瓜哇糖の半價より二志安の相据にて買付約定を爲せりとあり英國政府は今日迄に本年度產の瓜哇糖(来る六月以降產出のもの)を約計五十一萬噸賣約したるは既記の如きなりが明年度の産糖明年六月以降產出のもの)に對する買約は今回の手合を噓矢とし世

當期者に於ても其設備に腐心中なるが先づ其手始めとして錫農家六名の申請により委託試験をなす事に決し十一日全部の種植を終了せり(五日)

一句づ

(五日の日會誌抜)

虎耳
小亭の草刈らし相殿黄
花桐の盛る雨蓬納屋走
鶏舍繞る灯に花桐仰ぐ哉

丘
平

百瀬

海^{うみ}の灯^{あかり}間に消^き行^くきこたつみの島^{しま}
 舟^{ふね}玉^{たま}の夜^よを我^{われ}が船^{ふね}は行^く
 旅^{たび}覺^さむれば大^{おほ}わだつみを越^こへて來^き
 七^{なな}び旅^{たび}人^{ひと}なりき釜^{かま}山^{さん}近^{ぢか}しも

コライの鐘^{かね}にはのあけニコライ
 の鐘^{かね}に暮^{くれ}れつゝ旅^{たび}に慣^なれ行^く
 『鐘^{かね}に哀^{かな}れ』
 水^{みづ}がへ袖^{そで}をきれば細^こなごをそさへ
 已^い母^{はは}に仰^{おほ}たるが悲^{かな}し
 眞^{まこと}に歸^{かへ}らむとしてもがき居^ゐる一^{ひと}
 ハのわれをみ出^だして夕^{ゆふ}べ
 思^{おも}ひきめて今日^{けふ}もあたふた歩^あみ居^ゐ
 うせし望^{のぞ}のゆくを求^{もと}むと

鈴木吉和子

全一冊
四六版美裝
正價金二圓
送內地金拾貳錢
舊得金壹拾錢
博太金壹拾錢

全一冊を版一冊四角五分皮刷正装金四五十錢
 送料込内附五錢 臺灣樺太金手刺 朝鮮支那金手刺
 本書は本邦唯一の便宜格言に關する大
 辭典として、先年刊行以來、斯界の權
 威として推重せらるゝもの、今次僅少
 部數を限り、特に左記大廉價を以て江
 湖に提供す。

諸部數に
 限り
特價金三圓也

部數僅少一刻も早く御申込を乞ふ。

以上何れも有願宜袖珍辭典に關し、好群同に企圖たり。

袖珍 國語辭典	袖珍 漢和辭典	袖珍 英和熟語辭典
刊行	刊行	刊行
五月中旬	先本四三 正書金三錢 臺灣金四錢	先本四三 正書金三錢 臺灣金四錢

品質本位
の勝つ世
となりま
した
賢明なる
愛輪家各
位の爲め
に誠意を
以て



堅牢 實用

トンケ自動車

被賣元 東京 大阪 京城 日米商店

各地有名な自轉車店にて販賣す

を推奨

すケント
號が實用
的最善最
良の模範
たるは決
して自畫
自賛に非
ず

東京 京城 大阪 日米商店

有朋堂書店
大阪屋號書店

[illegible]

北京外國銀行團は兌換停止に付き海關及印税に及ぼす重大なる影響に付き如何なる處置に出づべきやに關し會議すべく十五日會合せり問題餘りに重大にして何等決議を見るに至らず（北京特電）

つゝあるが該査定に對し不服を唱へ
高等土地調査委員會に申告して来る件
數は當初 郡町村十五件以内に来る
ざれば第一 郡町村の觀察なりしも
如き慶南金海郡の如きは一郡一島に
して實に千七八百件の多數を算し土
地調査終了までには一府郡四十四五
件、山樺式會社の設立は最近の

下道長官に於て推選中なれば速か
く決定任命を見る可し

●**鑛山會社問題**

小林氏等の分岐に就て
山口太兵衛氏談

中國交通兩銀行兌換停止に付き十五日奉天商務總會にては大會を開き財政廳長出席し奉天は特別の事情を有し居るを以て政府の命令に反するも兌換を停止せざる旨を述べたるに一同満足の意を表せり尙奉天に於ける經濟界は今の處同等の獎勵なし奉天特電

なりしを三回に増し更に委員の數を増加し裁決の迅速を期しつつあるが、繰返の成績を聞くに其の受理件數不服申立初期に滿了したる廿八市街地四十五郡の分二千七百七十七件不服申立の分一千三百六十七件に對し、審査の内容が當初の越旨と異なれば、とて發起人たるを辭し津田鐵雄等も亦手を引くに至り、詮議書に對する世評粉々たるものあり之に就て發起人の一人山口太兵衛氏は證言するに「山田君は、發起人たるを辭し津田鐵雄等も亦手を引くに至り、詮議書に對する世評粉々たるものあり之に就て發起人の一人山口太兵衛氏は證言するに」

張將軍は時局に對する意見として奉天省に露國及び日本勢力圏の境域に挾まれ居るを以て獨立を宣する能は
ち奉天は敵政府を距ること遠く獨立を宣言するも消息通
じ難し、故に輕舉妄動せず徐々に間接を見て行動するを可とする旨を
秘密に訓諭せり（奉天特電）

保安林の面積
大正四年度中に於て保安林に輸入せられたる地は各道合し總計一百三十九萬一千八百七十三坪なりと
併せて作數四百九十八坪處理未済及び其他四千八百七十三坪なりと
一割五分以上の率に達せは即ち其遺剩せんと公益事業に投じて國に
人たらんことを求められしが本来
緒の趣旨にては概成し難く且つ全
加へんが爲めに特に從來商業を營
に實績を認めんとす

上海に在る孫逸仙は東三省に對する方針を商議確定する爲め此程大連より上海に起きたり而して其の際袁世凱をして奉天革命黨首領顧人宜揚大實二人を電報にて招かしたるが根拠は病の爲め李國樞代つて十五日大連を出發したり(奉天特電)

風、秋九十一一百六十五町歩。魚沼郡に遷したれども肯かざりしを以て
林十第五十二町歩、飛騨防止林六町歩。最初の計畫はたつ小林藤原右衛門若
九段歩なり又た同年度中に於て保安上の爲に置いた種々改訂變更を期へ
町歩を廢除しては秋林五町歩、面積六十町歩の數に變かましなるが
可なり、而して之を大正三年度即ち昭和元年朝鮮に於ける出資者

倫敦デリー、マデラグラフ通信員はガゼットに寄稿し日本の態度と題し略して曰く日本が此際武斷政治派を倒し文人派の支那政府を北京に建設することに努力せば凡ゆる幸なりと云ふ。然れども、（ハルビン） 俄然強が禦外策を授くるに當るに非ざるべしと云ふ。北京特派員は、（ハルビン） 俄然強が禦外策を授くるに當るに非ざるべしと云ふ。北京特派員は、（ハルビン） 俄然強が禦外策を授くるに當るに非ざるべしと云ふ。

除明歩を算せり

●東拓の新植林

東拓本年の植林計畫に屬する元山附近銀源山約三百町歩を登山四十二町歩の植栽を終へ一昨日前臨在せし長

旨に於て甚だ賛成なれどもまた怪に驚起の道程に在る今日公益云々

欽作成の時に之を明記するを主當

せむとは余等の意見なりき從て

の意見によることも公益事業云々

政友會にては六日午後一時より同
政友會に於て政務調査大藏・農
商聯合會部會を開き豫て特別委員
に於て調査立案中なる産業獨立、農政

○大演習行幸

○帝大教授轉免

授免日中經費二時金二千三百圓

中川幸助

勳三等功正五位

東洋報

に於て、陸南なく從つて適當の濕潤あり
殖んご内地の其れと異ならず植木
下にて發芽し居る能はざる理由
附苗木の成育は意外に良好なるべ
す。其處迄歸して去りたるが如き海に

立寄る處に於て然し樹小枝は多
より葉に蔽ひ居り乍ら突然生長上
に於て陸南なく從つて適當の濕潤あ
り殖んご内地の其れと異ならず植木
下にて發芽し居る能はざる理由

遊はざるまに付き先般大空警内
省書記官は行在所其他の各地を視
察したるが東京御遊覧第一日は名
古屋離宮に第二日は武庫離宮に第
三日は三田なる利公館新原に

依願免官

○井口軍司令官

大幸 勇次

大塚實業博士
京都帝國大學理學科大學長
市川實理學博士
水野敏之丞

八百圓を支拂ひたれば山麓小部農民の盡はざる一時代とならず。而して納税者はひと時大に義務を果たしたとて喜びのあまり尙ほ明年以後も同方に納税植林を行ふ事となり居れり。同國憲法に於ては限りなく是をさる可ら

宿せるが十九日出發の豫定也(○終電)

●**査定不服申告** しんぐ
調査委員會の多忙に
應付し土地調査に
関係する土地調査員が

大正三十四年戰後當時の勞務より其後特
調査を爲せり(○東京新聞)

改善、地方經濟振興策等諸件に付き
●**中川少將逝去** せうしやうしやう
大正三十四年戰後當時の勞務より其後特
調査を爲せり(○東京新聞)

合はるは合計十箇所にして、其設立地は既に
其考を盡て決せるは、既報の通りなる
に、監査委員とて今日ま
でに任命されしもの左に如し
大隈正延（大隈正延正） 森田清
佐々木謙（大隈正延正） 森田清
佐々木謙（大隈正延正） 森田清
佐々木謙（大隈正延正） 森田清

○中川少將逝去

大正三十四年戰後當研所勞其其後復命となりたる陸軍少將中川幸助氏は

調査委員會の年代

臨時土地調査局には土地所有權に關する特定の緒索を地方土地調査

眼に設け管轄して地図を國圖關係者二

下に託命せしむる如し
 ▲南嶺呂里 大倭佐正呂里勝勝 土着
 佐太郎 ▲紅原勝勝 西第一成府勝勝 山
 佐助助
 而して慶南三萬、新羅新野野、平康殿
 利の地に陥ぬ最初の恩恵が外
 不利の地に陥ぬ最初の恩恵が外
 不利の地に陥ぬ最初の恩恵が外

緊要なる經營事項
示せり 尙今後二三箇月は所謂夏季
開閉期となれば、當分市況沈滞を持續す
るならんが、今京城府、關出、販所に
於て脱税ひたる四月中の當地の貿易
額を記し、前例とを比較し、其功果大體に於て普及しられざるも、何
地の都市に比すれば、關、府、縣、

京城府及び學校組合等の豫算を合する
時は五十六萬五千圓となり之を内
京城府改良勸行

是、大正三年秋に續行改良の一方法と
す

苗代改良勸行

京城道にて

師良の習獨者驗大
 費廉凡今人會機見木進星
 大入會金全免入會機見木進星
 東京本郷駒込込町東京
 電話下谷一四九八
 通信學

第位とす二十四萬數千人の人口を
於て過少なるが如き觀あるも、右は總
人口中内地人の居住者約六萬人に過
さずして大部分の者は自擔力の程度
で、明國に於ては、賃金も、賃料も、
期に對比する時は輸出移出に於て九萬
五千餘圓の増加を示し、輸入に於て
一萬八千餘圓の減少を示せり

●四月京城金融

京城商況に就き京城商會會議所
十九日金價午後七時より在京新聞
に於て、
參謀長の記者團招待
水駐韓公使參議長は旅順の移移として
十九日金價午後七時より在京新聞
に於て、

獎勵中なりと

大阪漁具商會
 大阪市西區寶塚南町一丁目六番地
 電話一四七〇
 山科著 工業
 新著 鑛物鑑定
 分所法
 定價一圓二角
 宗部製
 祿一振

超千八百戸、一萬千五百十人を減少
し、之れに多少の外國人を加算して、總
起三百戸、八千三百二十二人の減
少を示し居り、内地人の數は年々其
數加へんとしつゝあり、故に京城都
府の經濟に就て將來研究す可き問題
なるべきものなし、只餘かに牛馬、重石等
を賣るを見るに過ぎず、又、工部局規則に
入らざるも、未だ、繁しき工事の起るも
なく、一般貨物の賣行は物價の増騰
の不振、の時に歸りて、大抵、指つ
て市況、開陳の狀を呈し、資金の需用、見
えに、は想像も及ばぬ所がある、彼の
慶應超が、一廣西出身の廣東氣人に御
南言此誌、支那の目下の極

三行堂發行
新英和辭典
定價五圓
釘裝八折
五月十日發售

て、理、市街の統一、監獄部、公會堂等
の問題あり、教育の方面に於ては小
學校の建築問題ありて本邦一校の範
疇を爲す以外年々少くも五百五十名
ありしに達き今般瀬港にて金料
俵億の膨を示せし午後夏夢蘭期開
に入りたれば此處數箇月を差したる
資金の需用を喚起するに至らざるを
計し四月末東京城市九銀行の臨時會
盟二葉と掲げた一文に成ては其が打

▲袁總統も娘の文章には
厭だ恐怖して欲が北京を逃げ出
前異なる談話政壇顯微三題し北京
ゼットに掲げた一文に成ては其が打

方
 大坂市南區
 船場の性博
 遊園の開辦
 界権和の締
 結の氣脈島
 の姫寶原女
 女女女女女

な此を定むるを
東京城上水道の府管が府の經費に
移さるゝにせらば一面擴張費に多大
の經費を要すれども又他面において
は年額六七十萬圓の収益を得ること今
にして府の財政状態を見るに少し
ては廢歇の使用料年額八千圓を

更に之を前年同期に對比する時は
箱金に於て百四十九萬餘圓の増加を
示し貸出に於て七十五萬六千餘圓の減
少を示す

竹内豫備中將

て居ることである▲康は異に一
朝復辟論一を捏造して却て雑誌をや
つたが▲政府と米國との密約を
ツンガ會社の間に二千萬圓の借易を
成立せんとした時康は一文章を草上
に米國總領事サルモン氏に送り▲實

[illegible]

RYO
新潟化學工業所製造
黑色 鑄止塗料
ラントリカ

商會會議所の調に係る四月京阪商
兄は一般に出張船の時期ならぬ所當國
の大注文を要し、氣味配合を持し鐵道
相當の注文を呈せり而して大豆重石
等多少の移運に非ずと雖も本報
言ふ

●**邱尚道路工事計畫** 京城
釜山嶺一帯の附近に屬する縱貫線中
部州大邱間の新設に關し、韓總督
臣廷臣は目下土木局京城出張所の手
續無二の潛航艇勇士で、以て前作は
の大體である。而して駐韓少佐が
揮て濠洋航路をやつて歸つて来る
此の潛航少佐は云々は、艦艇の
重國の潜航艇勇士で、以て前作は
無二の潛航艇勇士で、以て前作は

1929年11月
 RANT
 山手販賣 東京本町一丁目 三井物産株式會社
 朝鮮代理店 横山隆一 支店
 電話 一六七番
 說明書を御一報次第進呈

[illegible]

京坂本町一丁目
 諸官衙
 御用達
 金物商
 千代田生命相互保險會社代理店
 名古屋會社代理店
 古田會社代理店
 振替京坂
 電話一六三番
 佐野彦商店

[illegible]

千代田生命相互保身會社代理店
名古屋 古屋町簡式會社代理店
日本 石油 特約販賣店

三國志卷之六十五
魏書
王粲傳

